



もう25年も前、「BISES(ビズ)」という季刊雑誌に夢中になっていたことがある。イングリッシュガーデンを中心にした花の雑誌であるが、色とりどりの変化に富んだグラビアページに、世界にはこんなに優しく夢見るような秘密の花園があるのだと憧れていた。20年ほど前に初めてイギリスを訪れたとき、写真の通りのブルーベルが可憐に咲いていて、なにげない野原の風景にいたく感激したものだったが、それはやはり異国の庭であり、日本では見られないものだと思っていた。

宿根草を中心にしたイングリッシュガーデンは色々な種類の花が前後に入り混じり、一見適当に植えてあるように見えるが、草丈や開花時期、色合いなど計算されて植栽してある。日本人は花壇というと同じ花をべたっと植え揃えた色鮮やかなイメージを持っているので、よほど庭好きでないと、なかなかその良さがわからないかもしれない。

そして、月日が巡り、10年前から一眼レフカメラを使い始めると、ぼやけた背景にすっきり浮かび上がる美しい花の写真を自分でも写せるようになり、ますます花とガーデンが身近になっていった。日本でもイングリッシュガーデンが作られ、長野県の「バラクライングリッシュガーデン」にうっとりして、各地のガーデンによく写しに行き、去年は海外旅行でイギリスの庭園めぐりツアーへ。

「BISES」は買わなくなり、書棚に20年前の雑誌が6冊残っている。以来、季節の花は絶やさなかったけれど、イングリッシュガーデンに欠かせないバラは栽培が難しそうで敷居が高かった。一昨年に試しに鉢植えのバラを買ってみたら、予想より簡単に咲いたことから少しずつ増やしてきた。去年は隣の親の家だった庭をリニューアルして芝生を貼り、小さな花壇をこしらえて、つるバラなども植えた。けれど、風に揺れるナチュラルな花あ

ふれる理想のお庭には、まだまだ先は遠く、いつになったら小さな夢の花園ができるのか。

年とともに車の運転が少しずつ覚束なくなる夫を誘って、今年7月に3泊で北海道ガーデン街道めぐりへ。帯広、旭川、富良野など全部で9つのガーデンを見てきた。特に花好き庭好きでもない夫が辛抱良く付き合ってくれたことに感謝。1ヶ所1時間から2時間までという早回りもいいところだが、各庭園は立地や趣向も違い、それぞれに特色があり、飽きることなく堪能できた。自分でも本当に花の庭が好きなんだと思う。

しかし、私もボケてきたのか、4つ目の「六花の森」のショップで、お菓子といっしょにこれも買ってと夫に頼んだ「北海道ガーデン」の本と、7つ目の「上野ファーム」で私自ら買った本が同じものだったとは…頼んだことをすっかり忘れ果てていたのだ。全く同じ本がポンと2冊！本と本、ホント、年は取りたくない。

庭といえば、最近では日本庭園にも少しずつ目が向いてきた。電車30分で京都に行けるところに住んでいながら、昔から辛気臭いお寺や神社には全く興味もなかったのだ。シンプルの極致といえる石庭は、きわめて優れたデザインともいえる。そこに秘められた極楽往生、仏教や禅の思想などにはまだまだ思いが至らないが、造形的にはとても美しい。趣味で茶の湯も習っているので、茶室やお庭のしつらえも少しずつわかるようになり、それもまた楽しい。由緒のある庭でなくても、最近の作庭も古来の様式と斬新な現代性が融けあい、昔からそこにあるかのように佇んでいる。

近代の優れた作庭家の重森三玲(画家のミレーに傾倒して改名)は、自分の子どもたちにも完途(カント)、洪淹(コウエン)、由郷(ユウゴウ)、執氏(ゲイテ)、貝崙(バイロン)と今で言うキラキラネームそのものである。三玲の作ったお庭のいくつかは見たことがあるが、有名な東福寺方丈の庭は近々訪れてみたい。

「北海道ガーデンを旅する」 世界文化社
「重森三玲の庭案内」 平凡社